

よく考えて書く子どもの育成

－読み書き関連指導を手立てとして－

上越市立明治小学校 寺島 元子

1 はじめに

各種学力調査の結果から、本校児童には「自分の考えを分かりやすく説明する」問題の正答率が低いという実態がある。問題ごとに詳しく見ると、「答えは分かっているのだが、どう説明すればよいかわからない」「適切な言葉（算数用語を含む）を選び、使用することができない」「構成や段落の意識が薄い」などの課題が明らかとなった。

さて、平成25年度全国学力調査「上越市の結果概要」では、「目的や意図に応じて、必要な内容を選択したり複数の内容を関連付けたりしながら書く力を付けることが課題」（小6）と報告され、その対策として「読み物教材で学んだ効果的な表現を、実際に文章で表現する際に活用する等、「書くこと」と「読むこと」を関連付けた指導をする」ことが挙げられている。教材文の「読み」の学習で習得した知識・技能を、自らの表現（「書き」）に活用するためには思考が必要となる。したがって読み書き関連指導は、児童の思考を促す指導法と言える。

以上のことから、本校児童の思考力・表現力を高める手立てとして、読み書き関連指導が有効だと考え、研修テーマを設定した。

2 実践の実際

2-1 単元名 大養小・南川小4年生にホテルの学びを伝えよう（教材名「アップとルーズで伝える」）

2-2 指導目標

◎アップとルーズを対比してそれぞれの長所と短所を読み取り、映像や写真が発信者の意図や目的に合わせて選ばれていることを理解する。（読む）

◎伝えたい内容に合わせて選んだ写真を、分かりやすく説明する文章を書く。（書く）

2-3 研修テーマとの関わり

(1) 本単元における「よく考えて書く子ども」の姿

・伝えたい内容に合わせて選んだ写真を、分かりやすく説明する文章を書く姿

(2) テーマ具現の手立て

①教材文「アップとルーズで伝える」の読みの学習と表現活動とを関連させた指導

教材文の読みの学習と表現活動とを関連させ、読みの学習で学んだことを表現活動で活用させることにより確かな定着を図る。活用を図る知識・技能として、次の2点を考える。

ア) 情報発信のための知識・技能（以下【知・技ア】）

伝えたい内容に合わせて、アップとルーズの長所を生かし、効果的な写真を選ぶこと

イ) 書くための知識・技能（以下【知・技イ】）

伝えたい内容に合わせて、写真を分かりやすく説明する文章を書くこと

②読みの学習における振り返り活動

教材文の学習で得た知識・技能を個の表現活動に活用できるものとするために、1次第3、4、5時の終末で「学んだこと」を短い文章にまとめる活動を組む。

③相互交流の場の設定

小グループで共同推敲を行う（2次9、10時）。推敲の観点は、「ア) 選んだ写真は伝えたい内容に合っているか、イ) 伝えたい内容に合わせて、写真を分かりやすく説明しているか」である。1次で学んだ知識・技能を生かしながら話し合い、必要に応じて修正する姿を期待したい。

2-4 単元の展開

次	時	学習内容
0	総合	「ホテルの学びを大瀧・南川小4年生に伝えよう」という活動目標を設定し、各校を訪問しプロジェクトで写真を映しながら発表するという単元のゴールをイメージする。
1	1～6	効果的に写真を使って分かりやすく説明する方法を学ぶために、教材文「アップとルーズで伝える」の読みの学習を行う。
2	7～10	モデル文に倣って、各自が発表原稿（下書き）を書く。 教材文の学習で学んだことを生かし、推敲の観点 ¹⁾ に沿って下書き原稿を共同推敲する。
3	11,12	スクリーンの写真を指し示しながら発表練習をする。
	総合	大瀧・南川小を訪問して発表する。


2-5 授業の実際（2次第9、10時）

ここでは学習者Hと学習者Kに着目し、共同推敲の経緯を分析することで、授業の実際を考察する。データとして、下書き原稿（推敲前と推敲後）と、班トーク（共同推敲）の音声記録を用いる。なお、音声データは、ICレコーダーに録音したものを一定の書式に従ってトランスクリプトした。書式は松本（2006）^{*1}による。


（1）学習者H

① 下書き原稿（「2」の部分のみ）の分析

A 推敲前

	<p>昔は山の木を切ってたき木やおフロごはんだんぼうにしていました。いろいろの大きさの木を切ると小さな生き物のすみかになります。人のやっていたことが小さな生き物のためにもなっていました。人と生き物が共存していました。</p>
--	--

B 推敲後（ゴシック下線は修正箇所）

	<p><u>この写真は昔の人が木を切っているところです。</u>昔は山の木を切ってたき木やおフロやごはんだんぼう<u>などのねんりょうに使われたり、家を作るのにも使われていました。</u>いろいろの大きさの木を切ると小さな生き物のすみかになります。人のやっていたことが小さな生き物のためにもなっていました。人と生き物が共存していました。</p>
---	--

推敲後の文章には、「この写真は…」のように写真を説明する文と、昔は木が「家を作るのにも使われてい」たという情報が付け足されている。さらに、「里山の暮らし」をまとめた掲示物から昔の伐採の様子へと、写真が選び直されている。これらの推敲が行われた経緯を、対話分析により考察する。

② 班トーク（共同推敲）の対話分析

【参加者：学習者H、X、Y、Z】

<p>1X：(2) 木で家を作ることってさあ、書いて＝ 2Y：＝ある？＝ 3X：＝どこ？＝ 4Y：＝なくね？＝ 5H：＝ない。 (略) 10Y：じゃあ、どっかに、つけ、 11Z：どっかに書こう。でも、ここら辺にさ、 (略) 69X：暖房、などの(.) 燃料に使われたり、 70Y：使われたり、 (略) 76H：燃料、 77X：燃料に使われたり 78H：に使われたり、(15) ((つぶやきながら書く音))</p>	<p>メンバーは、原稿を書く前にまとめた「学んだこと・伝えたい内容」シートの記述と、下書き原稿とを比較しながら話合っている。1X以降の連続発話は、シート中の「木で家をつくること」が下書きに書かれていないことを指摘している。その後メンバーは、この内容をどこにどのように書き足せばよいかを検討している。83Hまでのプロトコルに見られるように、メンバーは発話をつなげながら思考し、「おフロごはんだんぼうにしていました。」から「おフロやごはんなどの燃料に使われたり、家を作るのにも使われていました。」という</p>
--	---

79X：たり、
 80H：木で、家を=
 81X：=家を作るのにも、使われ=
 82Y：使われて、いまし=
 83H：=た。
 (略)
 95X：あとさ、このさ、この文にさ、この写真合うかな？
 96Y：え？この写真？どの写真？
 97X：この写真、ん：：どうだろう？
 98Z：ねえ、／／う：：ん、なら、こっちの方がいいんじゃない？=
 (略)
 103Y：こっちの方がいいでしょ=
 104Z：=だってほら、木を切って、木を=
 105H：じゃあ、どうすればいいか=
 106Z：木を切ってって、
 107H：じゃあ、
 108Z、Y：((声を揃えて)) 木を切って、
 109H：あ：：そうですねえ。
 (略)
 211Y：写真をする文章
 212Z：そうだ。それ：：() しました。
 213Y：写真を説明する文／／章。
 214Z：／／これは、
 215Y：これは、何々の／／写真です。
 216Z：／／写真です、がないと、
 217X：ここに、最初こさあ、これ=
 218Z：最初こさあ、これは、木を、昔の人が／／木を切っている写真です、とか入れた方が／／いいんじゃない？=
 219Y：／／木を切っている写真です、／／そうそう。
 220H：／／うん。
 221Z：じゃあこころ辺こさあ、入れといて。
 (略)

新たな表現を考え出した。連続発話（発話のつながり）や同時発話（発話の重なり）が多く、活発な話し合いと言える。

また、95Xは、推敲前に選んだ写真が伝えたい内容に合わないことを指摘している。96Yはこれを聞き返すことで次の発話を促し、98ZはXの意図を理解した上で、思考しながら別の写真を提案している。Yもこれに同調し、2人で「木を切って」とその理由を繰り返し述べている。これは、「昔は山の木を切って」生活に利用していたことや「いろいろな大きさの木を切ると、小さな生き物のすみかになり」「人のやっていたことが小さな生き物のためにもなっていた」ことを伝えるためには、掲示物の写真よりも昔の伐採の写真の方が、インパクトもあり効果的なことを意図しているのであろう。これに対しHは、109H「そうですね。」と同意している。

その後メンバーは、机間指導中の授業者から推敲のポイント（板書）を読み直すよう促され、その中でYが211Y「写真を説明する文章」が足りないことに気付く。すかさずZがこれに同意し、対話する中で「この写真は昔の人が木を切っているところです。」という1文が考え出された。

以上の分析から、メンバーが対話によって思考を進めながら、観点A) 1) に沿って原稿を推敲していく様相が確かめられた。

このようにして児童は、共同推敲という学習の場で、活用しながら【知・技A】【イ】の習得を確かなものとしたのである。

(2) 学習者K

① 下書き原稿（「2」の部分のみ）の分析

A 推敲前



種ボタルとりが終わったら虫かごに入れてホタルを育ててかんさつをしました。成長してきたら水をいれて育てました。さてここで問題です。ホタルは、オスの方がメスより光る場所が大きい。それとも、メスの方がオスより光る場所が大きい。どちらでしょうか。

B 推敲後（ゴシック下線は修正箇所）



種ボタルとりが終わったら虫かごに入れてホタルを育ててかんさつをしました。成長してきたら水をいれて育てました。理由は、川にホタルがたくさんいるからです。さてここで問題です。ホタルは、オスの方がメスより光る場所が大きい。それとも、メスの方がオスより光る場所が大きい。どちらでしょうか。

推敲後の文章には、「理由は、…」の1文が付け足されている。これは、ホタルの飼育水槽に水を入れた理由である。この推敲が行われた経緯を、対話を分析し考察する。

② 班トーク（共同推敲）の対話分析

1T: ねえ。秘訣の3つ目、理由をつけたせるところはないですか。みんなにとっては当たり前なんだけど、大養小・南川小の人にとっては、「えっ、なんで？」って思うところ、見つけられないかな。2の所で。
2U: これじゃない？ 先生。先生。ここですか？先生ここですか？
3T: 自分たちで考えて。
4K: たぶんここ。
5U: ここじゃね？
6K: 水を入れて育てた、水を入れて育てました。(2) 育てた理由。育てた、育てた
7V: 育てた理由は、
(略)
14V: 育てました。なぜ水を入れるかという。う：：と、放流した後水の中で生きていけるように//ちがう？なんでだろう。
15K: //水を入れて育てました。
16W: 水を入れて育てました。
17K: 水を入れた理由は、
18K: あ、分かった。ホタルが水の所に住むから=
19U: ⇒違うよ。卵から落ちたら、幼虫が水の中に入らないと、//自然でもすぐに水の中に入らないといけな

【参加者：学習者K、U、V、W、授業者T】

机間指導中の授業者が1Tのように声を掛けたのは、水槽の中に「水をいれて育て」た理由(卵から孵った幼虫は水の中でないと生存できないから)を付け足す方がより分かりやすい説明になると考えたからである。学習者にとって水槽に水を入れるのは当然のことだが、情報の受信者にはホタルの飼育経験がなく、より丁寧な説明を必要とする箇所である。これに対しU、Kはすぐに、理由を付け足すべき箇所に気付いた。だが、その理由をどう説明したらよいかは、なかなか思いつかない。メンバーは、6K以降、前文の「水を入れて育てました。」を繰り返しながら、全員で思考する。そしてK自身が18K「分かった。ホタルが水の所に住むから」と発話すると、Uが連続発話で19U「違うよ。卵から落ちたら、幼虫が水の中に入らないと」と、その理由を適切に述べた。だが、前述の通りKのシートには「理由は川にホタルがたくさんいるからです。」と書き足されるにと

どまった。これでは、水を入れる理由を十分に説明しきれたとは言えない。Uの意見を得たにもかかわらず、なぜKに適切な理由付けができなかったのか、ここからは判断がつかない。相手に必要な情報は何か、自分とは立場の違う相手の認識を推量して意味付けることは、4年生には難しい課題だったのである。

だが、プロトコルからは、友達との対話の中で思考する学習者の姿がうかがえる。たとえ適切な修正ができなかったにせよ、その過程での思考そのものに価値があると筆者は考える。それは、研究主題が目指す「よく考えて書く子ども」の姿である。

2-6 成果と課題

○相手・目的意識を明確にした言語活動により、読む活動、書く活動ともに意欲が向上し、これを単元のゴールまで持続することができた。

○総合的な学習と関連させて、国語科で学ぶ形式に応じた表現の内容をつくったことで、表現活動への必然が高まった。

○共同推敲では、読みの学習で学んだことを活用しながら推敲する姿が見られ、知識・技能の活用を図る授業作りができた。

△共同推敲において、自分とは立場の違う情報の受け手(大養・南川小児童)の認識を推量して理由付けするという修正は、4年生には難しかった。情報発信の際に、相手(情報の受け手)意識をいかに高めるかが今後の課題である。

3 おわりに

児童の思考力・表現力を高めるためには、知識・技能が活用される言語活動の組織が必要だと考える。そのための手立てとして、読み書き関連指導の有効性を実感した。ここで得た知見を、今後の単元開発に役立てたい。